

AnotherView

視点を発見するパーソナリティ・ノート

パーソナリティ・ノート「AnotherView」の刊行は、様々な方のものごとの捉え方を書き留めていこうという企画です。「AnotherView」は美専（長野美術専門学校）が発行しますが、登場するのは美専の学生や先生だけではありません。社会の人にも、時には子どもにだって、自身の視点を表わしていただきたいのです。それらの方々の疑問やひらめき、課題や考えなどがここに明らかになっていくことで、多様な価値観が共鳴してさらなるクリエイティブが始まるでしょう。「AnotherView」はものごとの見方を変えてくれる、パーソナリティ・ノートなのです。

This time's personalities

太田優海
渡辺真央
相澤徳行

絵になる、ってどういうこと なんだろう？

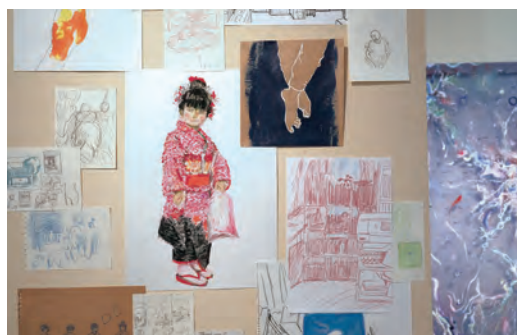
「絵ってなんだろう？」「絵になるってどういうことだろう？」と考えながら興味関心があるものをとにかくドローイングしました。自分なりの答えを作品として出せていたら良いなと思います。

(com. デザイン総合学科・2年次生)



太田優海

——11月4日まで長野市内で開かれた「街角アート展」(長野市主催)で、太田優海さんは壁2面に渡る作品群を出展。彼女が追究しているテーマとは？



「今回はドローイングを100枚前後描いたのですが、壁に展示するときにファインアートの先生から『この壁をキャンバス、そして君が描いた1枚の絵を絵の具だと思って、ドローイングを展示することで絵を創っていったらどうか』と示唆をいただき、壁に絵を描くつもりで配置しました。」

——作品に共通するテーマはありますか？

「『私』ですね。例えば『私が感じる地元の風景の心象・イメージ』だったり、『私の部屋から見える、私の目

から見える景色』だったり。『東京でみんなという自分をみた風景』や『着物姿の女の子』、当時の自分の写真を見て描いたり、イメージで描いたりそれぞれです。『1枚1枚描いている時はとにかく不安だったんですけど、並べみると『私ってこういう景色が見えているんだ』、『こういうことに興味関心があるんだ』ということが見えてきて、すごく勉強になりました。でも『私』に関してはまだ勉強中です。」

——今後も「自分」をテーマに描いていきたい？

「そうですね。今後は漫画という形で『“自分”・“私”・“自己投影”ってなんだろう？』みたいなことを深めていきたいかなと思って勉強中です。今回の制作は、『絵、ってなんだろう』、『絵になる、って何？』ということをや自分の中で見つける作業だったなと思います」

——そのヒントは見つかりましたか？

「例えば写真を撮るとき、何かを配置するときとか、全ての事柄の中に『絵になる瞬間』があって。そういうものが少し掴めた気がします。私はcom. デザイン総合学科なので、デザインの必修とアートの授業と両方受講できるんですよ。デザインの授業で『絵になる』ということに対して明確に説明してもらえた部分が多くて学びになりました。パワーバランスや情報の順序立て、レイアウトやデザイン、配置バランスや比率を考えるようになりまし

た。授業で気づきを得て、自分でもその感覚を磨いてきた感じです。」

——太田さんは県外の大学で日本美術史を学んだ後、学費を蓄えるために社会人として数年働いてから美専に入学しました。この道を選んだのは？

「『表現したい』、その手法が私にとっては“漫画”でした。表現の幅を広げたくかった。もっと人間として強くなりたかったですし。やりたくない仕事を『嫌だな』と思いながら生きていくよりは、不安はもちろんありましたが、後悔しないように好きなことにチャレンジしたいなと。」

——実際に美専に入学してみてどうでしたか？

「私の周りには、『高校時代まで“人”が嫌いだったけど、この学校に来て好きになった』っていう子が大勢います。私自身は、自分の中にあった『自分はできない』というコンプレックスがなくなった気がします。自分もできるんだって。これから努力する時に“きっかけ”がないと努力できないですよ。何か調べる時に調べる単語を持ってないと、それを調べることができないじゃないですか。その単語を、学校の色んな先生たちからいっぱいもらっています。この学校にきて、新たな可能性をもらえました。あと2年、漫画を頑張ってどこかの大会に応募して、自分の作品がどう評価をされるのか挑戦してみたいと思っています。」

共同制作は『最大値』が違います。



共同制作はクオリティの追求など、自分だけでは足りない部分を補い合えます。
(ビジュアルデザイン科3年制学科・2年次生)

渡辺真央

——「コラージュナガノ」「フロッタージュナガノ」の制作に取り組んでみていかがでしたか？

「みんなで制作する共同制作は『最大値』が違いますね。1人でやれば“最大値が出るグラフ”は“直線”なんですけど、みんなでやると、グラフは“曲線”を描くように“限界が見えない”んです。クオリティも高くなるし、チームワークはとても楽しいし、作品ができた時の感動が違います。

個人制作をしているときは、『これはもう限界だな』とか『自分にはこの技術がないから、ここまでしかできない

な』ってということがよくあるのですが、美研やゼミなどでみんなとやっていると、一人ではできない部分を補い合うことができます。『周りのみんなと補い合いながらも、自由に出来る』というところが、“美専らしさ”だなと感じています。自分がひたむきにやってきたことが、自分が予想もしていなかったことに繋がっていることがあります。自分の中の世界も広がって解像度が上がっていく感じ、やっぱりいいですね。美専に来てよかったと思う瞬間です。」

常に“逆振り”というか、別の見方、発想。



相澤徳行

多くの人がしている見方に「本当にそうなの？」と疑ってみる。
(ビジュアルデザイン科2年制学科長・グラフィックデザイナー)

——長野市のブランドビジュアルをテーマにしたデザインライナーゼミの今回の意図は？

「『美専らしく表現するにはどんなのがいいかな』って思った時に、美術の技法である『コラージュ』と『フロッタージュ』が思い浮かびました。自分たちが学んでいる“長野市”をどういう風に写し取ろうかなと。プロカメラマンがスタジオで撮ったような完璧な写真ではなく、目の前の友達の服装だとか、自分が持っている文房具だとか、そういう学生の日常的な写真で1つの作品を作れないかなと思ったのがコラージュ作品です。一方フロッタージュ作品は自分たちが学んでいる長野市を実際に回って、その場の感触とか空気に触れながら作品を作れないかなと考えて構築していきました。」

——相澤先生が考える『美専らしさ』というのはどんなものですか？

「まさにこの2つの作品もそうなのですが、目の前のことや自分の好きなことを一生懸命やりながら、出来上がったものは結構壮大で想像力がぐっと広がるみたいない……、この幅が美術の面白さだし、“美専らしさ”かもしれないですね。」

——デザイナーとしての相澤先生が大切にしていることは何ですか？

「デザインは、依頼してくれたお客さんや他のデザイナーさんが考えていないこと、社会が抱えている常識とは違うものを提案しないと価値にならないですね。常に“逆振り”というか、“別の見方、発想をしてみる”というのは、もう癖みたいなものとしてありますね。ネットの情報やニュースなどもそうですけど、社会で起きていることとか、目の前で起きていることを“そのままパクッと喰いつかない”ように心がけています。」

This time's fact

街角アート展



長野市の北野カルチュラルセンターで2024年10月29日から11月4日まで開かれた「街角アート展」。「文化芸術あふれる街づくりを進め、文化芸術活動の更なる推進を図る」ことを目的に長野市が主催したもので、長野美術専門学校をはじめ4校の学生の作品が展示された。

ファインアトラインの学生は、具象・抽象、平面・立体を問わず、幅広く自分の表現を模索する過程での試作。そしてデザインラインの学生は、長野市が昨年策定した「都市ブランドデザイン」のビジュアルを、写真の「コラージュ」と「フロッタージュ」という美専らしくベーシックな表現方法を用いてグループで制作した。



「コラージュナガノ」
登下校時に見かける看板や、机の上の画材、道路脇の草木、隣の友達の今日の服……そんな身近な風景が学生にとってのリアルな「私らしく生きる長野市」です。ぼけたりブレたり何てことない学生の日常を切り取った600枚ほどの写真を使いました。



「フロッタージュナガノ」
硬貨に紙を当て鉛筆で模様を写し取った経験が誰にもあると思います。美術の表現方法の一つ「フロッタージュ（擦り出し）」です。長野市の公園など10ヶ所で、地面に這いつくばり壁にもたれて模様を採取しました。

find Another View



好きなことから、はじめよう！
学校法人 クリエイティブA
長野美術専門学校